Alternative Systems Study Bulletin

第19巻第1号

（2011年4月10日）

Ⅰ．大震災と原発事故

私たちからの提案「脱原発社会に向けた"政治"を考える集い」

ルネサンス研究所運営委員会

Ⅱ．ルネサンス研究会報告

19日の研究会報告　市田良彦氏のコメント

2日の報告レジュメ（市田、榎原）　2日の研究会の感想

Ⅲ．スユ＋ノモワークショップ報告

後記

編集　境毅

連絡先　〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ　http://www.office-ebara.org/

メール　sakatake2000@yahoo.co.jp

会費　正会員　：　年間 1口　10万円

賛助会員　：　年間 1口　3万円

購読会員　：　年間 1口　1万円

振込先　口座名　：　資本論研究会

（郵便振替）　口座番号　：　01090-5-67283

Ⅰ. 大震災と原発事故

3月11日の東日本大震災に、福島原発の巨大事故が重なり、大変な事態を迎えています。被害にあわれた皆様に心よりお見舞い申しあげるとともに、犠牲になられた方々とご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申しあげます。

今回の大地震と大津波、それに人災の原発事故が絡み合って、従来の日本の社会システムをゆるがせています。私自身がこれまで構想してきた21世紀における社会システムのあり方についても修正を迫られています。いままだ原発事故の顛末が明らかではなく、幸いにこのままの状態が維持されたとしても、多量の放射性物質を、長期間環境に撒き散らすことになります。このような事態を踏まえ、ルネサンス研究所では以下の提案を行っています。それぞれがそれぞれの持ち場で、この提案を現実化していくことが問われています。

私たちからの提案
「脱原発社会に向けた〝政治〟を考える集い」

ルネサンス研究所運営委員会　2011/03/29

私たちは今、その規模と質において未曾有の事態に立ち会っています。「３・１１」は第二次大戦後の日本社会の何かを決定的に終らせつつあるはずです。何より、数万の人々が命を失い、10万の兵士が動員され、首都圏では準「灯火管制」が実行されて様々なところから「挙国一致」が叫ばれる現在の状態は、戦争を放棄したはずの日本社会に訪れたひとつの戦争状態といっても過言ではないでしょう。そして政府は、福島原発の事故処理はおろか被災民の救済に対し、政策とその実行力を示す前に無策と無能力を露呈させています。私たちは今、危機の深度が測れないという危機にあります。いったいいつ、どの程度、原子炉は〝おとなしく〟なってくれるのでしょう。20万人を越える避難民のうち、どれだけの人々が元の土地に帰ることができるのでしょう。そもそも農業と漁業をはじめとする東北の産業は、放射能汚染下で〝復興〟可能なのでしょうか。誰がどのように、すぐさま必要となる救済と最低限の――それですら莫大な――復旧資金を負担するのでしょうか。そしてもっとも肝心の私たちの生命と生活は、今とこれから、いったいどれほど〝安全〟なのでしょうか。こうした未決定状態が日々、日本社会の深部に「これまでのやり方ではだめだ。ではどんな未来を？」という問いを突き付けています。

危機の原因は言うまでもなく原発です。津波は「想定外」であったと言われています。けれども、政治が「想定外」を言い訳のようにもちだすことは許されないはずです。「想定」を制度として限定したのは政治であるからです。そして、起きてしまった「想定外」は、社会としては二度と想定の外に追い出すことはできない。人々は現に今、放射能の制御不能な害悪をまさに想定に入れて、行動しはじめているではありませんか。端的に原子力に頼ることを止める決断をすべきときです。もちろん、止めるために考えるべき課題は無数にあり、止めるプロセスには時間がかかるでしょう。す

でに政府も電力会社も原発の新規建設など言い出せる状況ではないかもしれない。しかし日本にはまだ十数か所の稼動中原発があり、なにより東海地震の予想震源域にあり、耐震性に問題ありとされてきた浜岡原発がある！いつ地震が来るか来ないか「研究」している余裕はありません。そして「計画停電」は、脱原発社会に向けた移行期の電力管理問題をすでに社会‐政治問題化している。

現下の危機的な福島原発〝処理〟問題、予想される巨大〝復興〟問題、そしてほとんど手付かずのエネルギーの民衆的〝管理〟問題、それらのどれをとっても日本の政治を一から作り直さねばならないほどの質をはらんでいることは間違いありません。私たちはリセットを強いられてしまったのです。様々な社会運動に関わってきた人々が集い、何からどうはじめるのか、やり直すのか、ともに議論しませんか。その議論が政治を作り直す大きな力の触媒となることを期待しながら。

提案

４月２９日（金）祝日　議題設定のための準備会議
場所：文京区民センター３Ｄ
時間：14 時 30 分～17 時

５月２９日（日）　討論集会
場所：明治大学リバティタワー６Ｆ　1063 教室
時間：13 時～17 時

この提案についての当面の連絡先
ルネサンス研究所事務局　松田健二　電話０９０－４５９２－２８４５
メール　matsuda@syahyo.com

私自身も身近なところから取り組みを始めていましたが、この提案を受けて、それを全国的な取り組みの一環として取り組み、成果を共有しあうような形で進めて行こうと考えています。

Ⅱ．ルネサンス研究会報告

昨年 12 月に発足したルネサンス研究所の、関西での研究会が始まり、すでに 3 回行われました。2 月 19 日は私と寺田さん、4 月 2 日は市田さんと私が報告を担当しています。それぞれ基幹研究会で「運動の変容」をテーマとしています。また、3 月 19 日の分科会は堀田義太郎さんによるベーシックインカムについての報告でした。

今回は 4 月 2 日の基幹研究会の報告をします。まず、2 月 19 日の研究会の報告を掲載します。次に 19 日の研究会への報告文書「緊急の課題」に対する市田さんのコメントと、その続きである 4 月 2 日の研究会の市田レジュメを掲載し、その上で市田レジュメに応答した私のレジュメを掲載します。最後に 2 日の研究会についての若干の感想を述べておくことにします。

19 日の研究会の報告

Ⅰ．研究員からの問題提起

2 月 19 日のルネサンス研究所研究会「現代」の参加者は 16 名だった。まず一通り「緊急の課題」についてのコメントをいただいた。そのコメントについて当日の議論を踏まえて意見を述べておきたい。

1）「自然発生的な大衆運動が、最大限綱領レベルの要求で自己を組織しているとは具体的にどういうことか。」

まずこの質問から取り上げる。その際、最大限綱領と最小限綱領という言葉の意味や、この対比自体の問題点なども議論されたが、この文書が書かれた当時の意味について述べることからはじめる。

最大限綱領とは社会革命の要求で、最小雁綱領とは資本主義（ロシアの場合はツアー帝政）の枠内で実現可能な要求（主として民主主義的要求）という考え方は一般的だったと思う。ブントに関してして言えば、政治過程論的発想で、徹底した民主主義を実行したが、これも最小限綱領の枠内にある。

既成の党派の政治がみな最小限綱領であるという批判は、69 年から軍事組織をつくり、非合法党の活動を経験して得られた立場からのもので、軍事組織をつくって日常の闘争から一旦離れた時に、日常闘争をどう指導するかという課題とは別の、直接的に共産主義とは何かという議論（綱領論争）が起きたことにもとづく。既成の党派の政治には直接的に共産主義とは何かと問うような観点はなかった。このような問いはお題目だといって非難されてきたのだ。

だから政治運動が最小限綱領で、社会運動が最大限綱領だというようなことを主張していたわけではない。

大衆運動が最大限綱領的な要求で自己を組織しているということの意味は、大衆の要求が、資本主義の枠内では解決できないレベルのものとなっているということ。当時は環境問題が中心となって運動が起きていたが、資本や商品に対する批判やスモールイズビューティフルのような考え方もそうだ。

現在に即していえば、雇われて働きたくない、もう一つの働き方を求めるという要求が中心的なものだ。

最大限綱領については「最大限綱領とは資本主義を打倒するというレベルの闘争だから、大衆運動はその萌芽を含んでいるとは看做せるが、その要求で自己を組織しているわけではない」というコメントもいただいている。これに関していえば、綱領の内容と現実の運動との同一視があり、このような考え方からすれば、最大限綱領は革命的闘争の段階以前には存在し得ないことになる。そうではなく資本主義の枠内では実現できない要求だ。

2）「このような内容を、1988 年の時点で提起できた背景はなにか。」

この点については用意したレジュメを参照してほしい。70 年代初頭の武装闘争の総括として、「緊急の課題」を書いた時の問題意識を再現したものだが、以下に引用する。

「　三つの発見

1．小なりとも軍事組織を作って武装闘争を始めると、国家になる。

2．国家になると政治は党派の論理では不十分となり、国家による統治が問われる。

3．ソ連や中国の経験も含め、プロレタリアート独裁の国家による統治は未開発。
三つの課題
1．ソ連や中国での革命以降、プロレタリアートの独裁が実現されてはいない諸国でも文化革命が可能となった。
2．文化革命の促進のためには政治の基準を文化におくことが問われる。
3．文化革命は、本能的共同行為を迂回して不要とする脱物象化を実現する。
三つの結論
1．二桁の党派も、何千万人の党派も、維持するための努力は同じ力量を要する。（指導者の資質の問題ではなく、党派の存在基盤が問題）
2．一人で党派をつくれる人間を10人集めてひとりの人間のように組織できなければ新しい党派はつくれない。
3．新しい党派は出来る時にはおのずから出来る。」
この内容で、88年の時点での背景を理解していただきたい。
総括に関しては「RGの指導者としては第二次ブントの総括として出すべきではないか。武装闘争で革命をやろうとしたことが、ダメだったというべき。」というコメントをいただいている。
このコメントに関していえば、武装闘争の総括は『共産主義』18号（1983年）で提起していた。そこでは武装闘争に敗北したこと、その総括は提起しているが、「武装闘争で革命をやろうとしたことが、ダメだった」という内容ではない。私たちは、このような内容で総括することには反対であったし、このような総括をする人たちへの批判を「清算派批判」として、ずっと繰り返してきた。

3）「当時の運動はバラバラだったという印象。市民運動が使用価値批判に終始し、党派に対してネガティブだった。これで最大限綱領的な要求をもっていたといえるのか。ソ連の崩壊もあり、社会革命派的な受け入れ方になるのではないか。」
政治運動を最小限綱領の枠内としたことで、社会革命をいわゆる社会革命派の主張として理解されているようだが、背景でも述べたように、共産主義の内容が問われ、それを実現するものとして社会革命を想定していた。
「80年代以降の状況分析、歴史過程のなかで、政治運動と社会運動、党と大衆運動を二項対立的に捉えているのでは。大衆運動が最大限綱領の要求で自己を組織しているというのは意味付与でしかない」とか、「政治革命か社会革命かという問題の立て方が間違い。社会革命か社会改良かというのが本来の形。政治革命で社会革命を含まないものはない」といったコメントをいただいているが、大衆運動を60年安保型の街頭闘争に限定しているように思う。60年安保型の大衆運動は歴史的一時期に登場しえたもので、70年安保闘争では別の形になっていたし、以降はずっと不発だ。

4）「商品貨幣関係が日々再生産されているという考えは印象的だったが、文化でどこまで突き詰めていけるのか。」「脱物象化というと表象の批判になるのではないか。権力と生産手段を奪い合うなかで大衆がどう生産手段を確保できるのか。」「共産主義の内容を商品貨幣資本の廃絶というのは狭いのではないか。」「結論部分で、社会と文明の統合原理を批判すると書かれているが、共産主義と同じ意味か。価値批判の他にも何かあるのではないか。」「物象化による意志支配から逃れるということですべてか。」
これについては次回の議論を待ちたい。

5）「大衆運動の質をどう見るかが問題。最小限・最大限綱領という枠組みは70年代はどこも使っていて、綱領論争を思い出す。自分の考えとしては、最大限・最小限、という提起の仕方から脱却すべきだというもの。形式の問題として、革命観において100年の思考の枠組みを突破したい。党建設にとっても重要。」「大衆運動が最大限で、党派が最小限というのは、70年代に変容しているのではないか。ロシア革命、中ソ分裂で、革命の波が一つの着地点を迎えた。ニューレフトは左翼反対派的弱点を持っている。最大限――共産主義の再構築が問われていた。帝国主義と抵抗しながら再構築し、次の社会の萌芽を生み出すことが問われる。政治革命と社会革命、最大限綱領と最小限綱領といった見方についての総括が必要。」「権力打倒が中心で、社会革命は視野に入っていなかった、ということはよくわかる。社会革命に関わっているはずなのに、その中身のなさ。」
この辺のところがルネ研で議論すべき内容だと思う。

6）「よくわからない。党の問題は権力の問題で、政治弾圧に勝つための党組織の技術集団としての存在と階級の代表ということとの間の矛盾を感じている。」「小協同体は可能といっているが、具体的にどんなものか。」「権力論的に見て文化形成のネットワークはどのようにして自己権力になれるのか。」「物象化論についてはルカーチの階級意識論を思い出す。虚偽意識の批判であれば、レーニンの外部注入論のほうが正しい。レーニンの理論には二つあり、労働運動の外部からの注入と、資本と賃労働の関係の外部、国家と諸階級の関係の持込だ。外部注入しかない。」「文化論に収斂してしまってなぜ国家論、市民社会論がないのか。」
ここでコメントにある権力の概念はベクトル的な力を想定している。ところが文化の力はベクトル的には働かず、感染という形で広がる。共鳴が基本だ。あと、文化的勢力は重力的に評価することが大事だ。存在がどのようなベクトルを持っているかではなく、その重みそのものが権力に対抗している。
なぜ国家論、市民社会論がないのかという意見については、対面・対話関係の中に国家と市民社会が萌芽としてあること、対面・対話関係から国家と市民社会を位置づけなおすことなしには、大衆運動が最大限綱領のレベルの要求で自己を組織しているという理解には到達出来ないだろう。ただし、「『いま』『ここ』からの社会変革論」は社会生成の原理を説いたにとどまり、国家や市民社会生成にまで敷衍していない。コメントによってその敷衍の必要性が理解できた。

7）「政治より社会の方が広い。マルクスは政治的精神を持ってする革命か社会的精神をもってする革命かと言う問題を提起し、労働現場に置ける小さな反乱に注目している。」「物象化・脱物象化という言い方はしない方がいい。消費者大衆を馬鹿にしているのでではないのか。」「共産主義とは所有形態を問題にしているが、社会主義は所有のない状態で分業を問題にしている。国家の死滅後の社会を考えている。」
この問題提起は13日のKCMで議論する課題だ。

Ⅱ．次回研究会：4月2日（午後2時から）の課題

1）市田コメント
次回は市田コメントにある文化の捉え方を一つの軸に議論したい。

2）「21 世紀の社会運動の綱領草案」
19 日の議論にあった、5）のテーマについての議論を進めていくために、「21 世紀の社会運動の綱領草案」（2000 年 1 月）を検討材料にしたい。

榎原均「緊急の課題」(1988.12)を読んで

市田良彦　　2011.2

メモ的に――

①「党派の政治はすべて最小限綱領のレベルの要求で大衆運動を組織することを土台にしていた」、しかし②「今日、自然発生的な大衆運動の多くは最大限綱領のレベルの要求で自己を組織している」。
正鵠を射た指摘だと思える。しかし付された「解説」やＭＬ主義の「常識」（最小限綱領＝民主主義レベルの要求、最大限綱領＝商品・貨幣関係の廃絶）に、その理解を限定しないほうがいいかもしれない。というのも、①は運動とその主体形成、さらに革命に至るプロセスについての「段階論」と不可分であり、②は貨幣 - 商品関係の否定を即座には含意しないまま（つまり社会全体にかんする最大限綱領をもたないまま）、何らかの理想的関係を「拡大」していく運動論となって現れることもあるからである。榎原氏がどういう現実的事態を念頭に置いて、このように 1988 年末に書かれたのかは、本人の口から語ってもらうとして、ここでは私なりに整理・拡張された理解を記したい。

①の典型として。まずは私たちにはある意味で馴染み深い、議会主義に転じた共産党の図式――選挙で「民主的」政権ができなければ、個々の大衆運動に勝利はない。あるいは、個々のテーマ（「課題」＝勝敗のメルクマール）に縛られた運動は、それこそが政治である選挙に集約されるべき。(1) 具体的テーマに縛られた「低い」レベルでは「広範な統一戦線」を、(2) 国政レベルでもまずは反ブルジョワ - 反資本主義の政治的「統一戦線」を。(3) それから「社会主義」－「共産主義」への移行を。議会主義を否定しても基本的に「段階論」は同じ。その典型例としての中核派によるかつての三里塚「軍事空港論」。「軍事空港論」は農民の局地的な闘いを全国的政治課題に「押し上げ」ようという論理だった。しかしそれは、(1) 土地を守ることそれ自体に大した意味はない、(2) 農民の大義とは政府の無茶な「手続き」に対抗する民主主義的大義である、(3) 成田は「軍事空港」であるから、即自的には「低い」レベルにあるこの闘争が「高い」政治的意味（日帝のアジア侵略阻止！）をもつ。(4) したがって労働者や学生という非当事者が「主体的に」参加する意義も必然性もある、と事実上述べる論理だった。私たちはこうした段階論の陥穽と欺瞞をすでに十分知っている。運動の「段階」を「押し上げる」には、ある時点で「負ける」こともよい（「革命的敗北主義」の転用）、勝てるかどうかよりも「原則的に正しい」主張をしたほうがよい、云々。党派 - 活動家は「大衆」よりも「進んでいる」。その結果、「段階論」は運動の開始時点においては、不正の告発（誰でも同意できると想定された大義）しか言うことがなく、党派の

政治は一種の倫理主義として表明される。その告発がどこまで大衆の耳に届くかは「情勢」（大衆の「気分」を含む）次第だから、この政治は実は客観主義的待機主義を含んでいる（いつか成功するときが来る！――それまで我慢するのが活動家たる者の倫理である／我々の言うことに耳を傾けるのが人の道だ！）。労働組合的論理（「プロレタリアート」の利害）の追求が、そのまま体制の転覆に直結する戦略でありえる（と信じる）かぎりは、段階論は理に適っている。しかしその場合でも、あるいはそれがまさに客観性を失ったときには、「体制が転覆されるまでどんな運動も勝てない」という逆説が残る。明日の勝利が今日の勝利に先行しなければならない！　すると負け癖がつく。負けが込めば込むほど、党派的集団は「おせっかいなボランティア」的色彩を強める（信念に裏打ちされているので一定頼りにはなるが、「負け」ていなくなることもある）。

すでに 60 年代末から、一途に権力奪取への道を駆け上がろうとするこうした段階論ではない道は模索されていたはず。「社会革命論」と呼ばれることもあったし（生協とか、「共同体」とか）、70 年代末の三里塚闘争をめぐる議論では、中核派の「軍事空港論」に対抗する形で「生産 - 生活 - 闘争の一体化」論が登場した。それらは段階論に対しいわば「拡大論」の系譜として、かなり昔から存在していたのでは？　資本主義の現段階とは別の「関係」を今・ここで作り出し、それを社会的に、様々な手段を講じて拡大して行こう、とする路線。その別の「関係」に貨幣 - 商品形態の廃棄まで含まれているかどうかはさして重要ではなく、「オルタ」にとどまるから、その空疎さゆえに逆に「最大限綱領」的に見えることもあるのではないか。この路線の問題は「関係をかくめいする」力に関しては資本主義のほうがよほど強力であったこと（吉本は少なくともそのことは知っていた）。フランスの例では、６８年にもっとも「過激」であったはずの人々の直接の後継である「リベラシオン」紙が、いまやただの左派系一般紙。「文化大革命」は「階級闘争の継続」も「消費社会の肯定」も可能にしたことを忘れるべきではない。つまり段階論への対抗として拡大論を追求すると、「革命」は容易に消え失せる。あるいは観念のインフレに見舞われる（なんでもかんでも「革命」を語りうる）。ポストモダン現象は一部、そうしたものとして説明できるだろう。実際、ポストモダン概念を肯定する左翼（あるいはポストマルクス主義と自称した人たち）は、ミクロな闘争を「繋いでいく」（＝「拡大」の一形態）ことで左翼として生き延びようとした。

つまり①と②は「機動戦」と「陣地戦」の分岐や対立のパロディのように、あるいはその歴史的な反復のように、少なくとも運動論的には見える。現にラクラウ＝ムフは「ポストマルクス主義」の旗印でグラムシを再評価した。

榎原氏は（『赤報』論文において）「社会革命」と「文化革命」の概念を導入する。そこでの「社会革命」は貨幣 - 商品形態を廃棄していくプロセスとして定義されているようだ。では「文化革命」は？いずれにしても榎原氏の概念構成はレーニンの経験を下敷きにしているように思える。まず「政治革命」があり、つぎにプロ独のもとで社会主義化（→共産主義化）と国家の死滅がはじまり（それが「社会革命」）、自らの死の間際にその不調を自覚して「文化革命」が必要なのだと語るにいたった順序を参照して、三つの革命は分節されているのではないか。とすれば「文化革命」の中身は

さしてないと言うべきだろう。人々、とりわけ党員の「意識」が変わってくれないとね……と述べるだけとさして変わらない。実際、レーニンは指令を待つことに慣れた同志たちに向って、諸君、商売を覚えたまえと語っていた。中身がないか、それとも大きすぎる内実を「文化」の一言に押し込んでいるか。ジェイムソンは彼なりにマルクス主義の「文化論的転回」を語っていたが、その中身は俗に言うアイデンティティ・ポリティクスとどれほど異なっていたか（あるいは歴史的・現実的に異なりえたか）？これは榎原批判ではない。「文化」を語ることの罠は今日最も警戒すべきことがらではないのか、という提起にすぎない。

政治革命と社会革命の峻別も問題。これはマルクス主義陣営の外に目を向けるとよく分かる。ハンナ・アレントが行った二つの革命の区別が、今日の公共性論（新しい「社民」ないし「構造改革」派と言えるかも）に大きな基礎を与えているのである。すなわち、社会革命路線はフランス革命以来すべて「全体主義」に行き着いた、よって革命はあらかじめ限定された公共性レベルの政治革命に限定せよ、という議論である。

政治革命と社会革命の「止揚」――つまり区別を前提にした「総合」――路線もまた危険性をもっている。歴史的にみて、一定の「止揚」に成功した例は中国革命期の「長征」であるだろうが、それを一般路線化すれば容易にクメール・ルージュ型「戦士共同体」志向が生まれる。

段階論と拡大論の分裂は、運動論レベルで広く社会的に発生する以前に、共産主義にとっては「党」の問題として経験済みなのではないか。というのも、正統共産主義派にとって運動が段階論的に発展していくほかないものだったとしても、党はまさに共産主義を先取りした人間関係・社会関係を内部に実現した場として意識されていたからである。共産主義者にとっては、この党内関係を全社会化することが革命であり、党員を増やすことは工作者の増大であると同時に共産主義的関係の社会的拡大でもある、という一面をもっていたはずである。要はプロレタリアートの過半が党員になった瞬間、革命は運動としても社会状態としても勝利しているのである。

資本主義社会に浮かぶ孤島のような、未来社会としての党の現実的な問題はつねに財政問題である。党員は資本賃労働関係の「外」にいるのであるから、革命が成就するまで「カンパ」（機関紙の「販売」を含む）によって生きるほかない。それがどういう事態を党という存在に強いるかは、あらためて指摘するまでもないだろう。とにかく、党員とは革命が成就するまで貧乏に耐える存在であると現実によって定義付けられる。搾取された人々からの拠出金が「貧乏」レベル以上の生活をもたらしてよいわけはない！党員にとっては、革命運動は我慢比べのような側面をもつ…… 党の財政破綻こそ、社会革命路線（理想的関係の「拡大」路線）の不可能を実証しているかもしれない。

（続く……）

ルネ研報告 2011年4月2日

市田良彦

「自己権力」の系譜……第三領域としての革命（運動 - 組織）論

1） 経済決定論と疎外革命論の間 ～ 必然性と自由
「宇野経済学」の問題：革命を経済学の「欄外」に置く。非決定論（非窮乏化論、非危機論）の出発。戦後主体性論争や実存主義はマルクス主義と「分節」された。
「理論と実践」という問題の意味（ルカーチの再発見）

2） 「政治過程」の自立と自律
関西ブントの政治過程論：経済学でも哲学（世界観）でもない政治（過程）の発見。
竹本（＝滝田）のローザ論：ルカーチ「以後」のローザ問題としての「革命主体」。
弁証法を「強いる」という問題：自立はしているが自律していない（自己組織化が保証されない）領域の発見

3） 疎外でも物象化でもない階級形成（構成）論
実践論たりえない疎外論と物象化論―70年代の問題：倫理主義と「社会」分析への股裂きと「ポストモダン」的非決定論の登場
階級形成論としてのネグリのレーニン論：イタリア的特殊性？

4） 主体と構造：例外的なものをめぐって
サルトル→アルチュセール→？
ウルトラ主観主義とウルトラ客観主義の「同じ」さ加減
「無効になった」マルクス主義と「生き残った」マルクス主義

ルネ研報告 2011年4月2日

榎原 均

はじめに

震災と原発事故で、ルネ研の活動も大幅な修正が必要かと思われるなか、4月2日の研究会も、市田報告レジュメが出たことで、私の当初の計画の変更が迫られているように感じています。それでまず、市田レジュメへのコメントから。

A 市田レジュメへのコメント

1）へのコメント

理論と実践、あるいは理念と現実と実践（石井聞き取りあとがき）という枠組みに

ずっと違和感を抱いてきた。私の立場は一言で言えば、実践を認識の対象とする、ということ。

これは宇野批判のどこかで言っていると思われるが。ある意味ではマルクスも労働（範疇的には実践に当たる）を対象化された形態で分析し、資本論を書いた。

2）へのコメント

最近気が付いたことだが、これは社会の発見というところまで進めてほしい。

3）へのコメント

疎外も物象化も経済過程から発生するもので、それが今日では実践論足りえないのは、社会の維持・生成という問題に接近できないからではないか。対面・対話関係から権力を導き出すことで、これに対抗する自己権力の構想も立てられる。

ちなみにルカーチの「物象化」論というのは翻訳間違いで、原文は物化である。物化は等価形態の謎性から生じるもので、それだから階級意識論につながる。物象化だと虚偽意識批判ということにはならない。物象化は物象による人格の意思支配だというのが私の立場。ルカーチの誤訳によって、新左翼活動家の間で物象化の概念が物化に矮小化されてきたのかもしれない。

物象化＝Versachlichung　物化＝Verdinglichung　　sach=物象と、ding＝物、を訳し分けしているのは長谷部くらいで全集版の岡崎は訳し分けていない。

4）へのコメント

これまでの主体は個人か階級あるいは党派だった。今日の主体は、個々人の間に形成される関係的主体で新しい社会そのものではないか。これに私は協同主体と名づけている。

B　前回からの継続問題

1）継続問題

「商品貨幣関係が日々再生産されているという考えは印象的だったが、文化でどこまで突き詰めていけるのか。」「脱物象化というと表象の批判になるのではないか。権力と生産手段を奪い合うなかで大衆がどう生産手段を確保できるのか。」「共産主義の内容を商品貨幣資本の廃絶というのは狭いのではないか。」「結論部分で、社会と文明の統合原理を批判すると書かれているが、共産主義と同じ意味か。価値批判の他にも何かあるのではないか。」「物象化による意志支配から逃れるということですべてか。」

これについては次回の議論を待ちたい。（前回研究会報告より）

2）共産主義の理念

さしあたって思いつく事柄。皆さんからの提示を待つ。

① 階級の廃絶
② 経済的隷属からの解放
③ 能力に応じて働き、必要に応じて受け取る
④ 労働時間の短縮で労働が生活の第一の欲求となる
⑤ 必然の国から自由の国へ
⑥ 人間による人間の支配を事物の管理に代える

⑦ 国家の死滅
⑧ 労働者の解放、あるいは労働の解放

3）社会革命という用語について

私の社会革命という用語は、共産主義の理念を実現する革命のこと。普通に語られている社会をよくしていく（体制内での）という意味ではない。だから既成の社会運動が実現している社会革命そのものではなく、それらが、共産主義の理念を実現できているかどうかという基準で判断する。政治革命と社会革命という対比は、権力奪取から社会革命へとは行けないという批判をする限りでのもの。

4）文化について

「（文化は）中身がないか、それとも大きすぎる内実を『文化』の一言に押し込んでいるのか」（市田「榎原均緊急の課題を読んで」2011 年 2 月）というコメントに関して言えば、後者である。いま、ここでの社会革命を遂行する主体が文化を発信する、あるいは文化しか発信できないという認識。現実に脱物象化に向けての取り組みは多々あるが、ほとんど認識されていない。文化を知の対象とすることが問われている。

5）問題を党にひきつける

綱領、戦術、組織という三位一体はどうなるか。
綱領は共産主義の理念
戦術は迂回作戦
組織はコミュニケーション論

そのとき一人一党となる。これは万人が自己神格化した今日の前提的条件ではないか。

生身の人間は政党に組織しえた。自己神格化した個人にとっては連合しかない。

政策実現のためには議会に代表を送る（それもあっていいが）のではなく、既成の議会政党に政策提言して、超党派の議員連盟で政策化するのが当面の課題。政策立案能力が個人の連合を作り上げる土台。

6）研究所の課題

社会の発見に基づいて、実践を認識の対象とし、共産主義という理念の実現を、いまここから開始できる運動形態を知り、実践すること。

脱原発社会を求める運動に関していえば、さまざまな運動の幅広い連携を作り出していける可能性がある。当面地道な講演会、学習会を重ねながら脱原発社会の見取り図を作り出し、統一行動を作り出していく。既に廃炉に向けての署名活動は実施されている。研究所の課題は山積している。

2 日の研究会の感想

事前の予想通り、4 月 2 日の研究会は私自身が設定したもくろみとは違う形となりました。市田さんの報告にしたがってたくさんの論点が出されましたが、私の問題意識にひきつけて、感想を記しておきます。

まず、理論、実践、科学、といった基本的な用語の概念がそれぞれ違っていると感じました。私は理論とは認識の体系化くらいに考えていたのですが、そもそも対象が理論の対象たりうるかどうかという考え方が表明されたり、科学と同義的に使われたり、という感じで戸惑いました。また、後期アルチュセールの理論と実践についての思想に関しては興味ある報告がなされましたが、市田さんの報告は別途文章化されるということなので、厳密な議論はその後にしようと思っています。

次の論点は脱物象化に関連して自己権力という問題提起がなされたことです。脱物象化だとか文化だというと権力問題が欠落する、というところをいかにして補強するかというように私は受け止めたのですが、対面・対話論から権力をどう導き出すかという問題と絡めて考えて行きます。この点に関しては無意識のうちでの本能的共同行為についての質問もあり、これについては価値形態論の読みが必要です。引き続き継続して「緊急の課題」についての研究会を持ちたいという意見も出されており、次の機会が与えられれば、価値形態論を取り上げようと考えています。

あと、権力論の問題と関連して、大衆的なデモがなぜ出来なくなっているかという問題も検討されました。大衆的政治闘争が外国とは違って日本ではこの間不発であること、この問題は例えば60年安保闘争であればそれを支えていた、労働組合、学生自治会などの共闘会議があり、第一波行動、第二波行動というように段々動員が多くなっていって、最終的決戦にいたるというような大衆的政治闘争の発展法則が貫徹されたが、今日の日本の運動では、一日限りの大衆的結集は可能であってもそれが続いていかないという問題があります。

この大衆的政治闘争の再現には、その運動の担い手を新しく育成していくところからしかはじまらないように思います。例えば今呼びかけられている、ルネ研の脱原発社会に向けた政治、という問題は大衆的政治運動の再生の手がかりとなるのではないかと思っています。青年労働者がその担い手として登場しなければなりませんが、反貧困で結集している諸団体が、政治的統一戦線の担い手として登場できるかどうかに注目しています。

あと、先に少し触れた脱物象化という規定は、新しい主体形成の方向性を指し示すものと考えているのですが、それはいきなり体制変革との関係で自らを位置づけられず、21世紀の社会システムの設計という、よりましな社会構造の形成という路線との関係で、ヘゲモニーを取っていくということにならざるを得ません。共産主義の見地からすれば、構想された21世紀の社会システム自体が変革の対象となりますが、変革の対象であるような社会システムの設計をしながらヘゲモニーを取るというようなことは、ツアーの絶対王政に対して民主主義を要求したロシア社会民主党の戦術とのアナロジーで位置づけることが出来るのかもしれません。ブルジョア的民主主義国家は共産主義の見地からすれば変革すべき対象ですが、しかしそれの実現を掲げてきたわけですから。そしてロシアの民主主義的変革の時期に、社会主義的変革をしようとしたボルシェビイキの試みがソ連崩壊という形で挫折した時に、民主主義体制が制度疲労している先進諸国での主体形成が、自己権力としてしか構想できないという現実での新たな陣地戦のイメージが問われているのでしょう。

とまれ、20年ぶりに私の提起が議論されたことで、いろいろな問題が見えてきたように思っています。とりあえずはコミュニケーション論の研究を継続させながら、陣地線のイメージを描き出せたらと思っています。

Ⅲ. スユ＋ノモワークショップ報告

ワークショップの概略

1）はじめに

23～26日ソウルに滞在し、スユ＋ノモのワークショップに参加しました。研究空間スユ＋ノモについては金友子『歩きながら問う』、インパクト出版会、をお読み下さい。その後、研究者の人数が増えすぎた（30名から300名）こともあり、現在は6つに分かれて活動しており、今回の訪問は現代思想や社会革命について主として研究しているスユノモNでした。Nはノマド（遊牧民）のNです。分割については『インパクション』最新号（178号）所収の尹汝一論文を参照してください。

大阪大学のGCOEの研究プロジェクトで、スローワーク協会の活動の報告ということが要請され、協会の理事3名（高橋、渡邊、境）が参加しました。

テーマは「コンフリクトの人文学」で、「横断するポピュラーカルチャー」というプロジェクトが組まれていて、日本からは、冨山教授他大阪大学の院生が中心で、14名が参加しています。

24・25日両日午後から10時間にわたる濃密なセミナーが開催され、参加者は60名くらいで若者が多かったです（60歳台は多分いませんでした）。

2）ワークショップの日程

＊　テーマ：大衆の主体形成と文化の政治学

＊　24日

午後：ワークショップⅠ

1．「共同体の言語的想像力――『ロンリー・ハーツ・キラー』を読む」沈正明（阪大院生）

2．「松下竜一の運動論――優しさをてがかりに――」堀川弘美（阪大院生）

3．「宗教とファシズム、その不適切な結合について」　ソン・ギテ（スユノモN）

4．「開発独裁とデザインの政治学」パク・ウンソン（スユノモN）

夜：ワークショップⅡ

1．「協働表象のためのノート」永岡崇（阪大院生）

2．「店舗空間のコモンズ的利用としてのクラブカルチャー」太田健二（龍谷大学非常勤講師）

3．「インディーミュージシャン故イ・ヂョヌオン追悼公演が残したもの」ホン・ソヨン（スユノモN）

＊　25日

午後：評論と討論

1．冨山一郎のハングル版書籍について

『戦場の記憶』（日本経済評論社）

『暴力の予感』（岩波書店）

2．「カフェと文化の実践」渡邊太（阪大助教・スローワーク協会理事）

夜：ワークショップⅢ

1．「カフェコモンズがどのようにして『ある』かについて」高橋淳敏（スローワーク協会理事）

2．「『いま』『ここ』からの社会変革論」境　毅（スローワーク協会理事）

3）ワークショップの状況

ワークショップは事前に用意された報告（それぞれ翻訳されている）を読み合わせる形で行われました。事前報告書が長すぎて、各報告5〜6頁分をセレクトしそれが読み上げられ、コメンテイターがコメントした後会場からの意見を求めるというスタイルでした。

第一日目はすごくタイトなスケジュールとなり、討論する時間が取れませんでしたが、二日目になると、冨山のハングル版へのコメントが鋭い問題提起をし、すごくいい議論が出来ました。また夜は食事の時にお酒も出て、文字通りの饗宴（シンポジウム）が実現し、報告は、きわめて具体的な高橋ときわめて抽象的な境というちぐはぐなものでしたが、議論はそれなりに面白かったです。

4）社会運動へのつながり

それぞれの報告は、場の形成に的を絞った文化論が軸となっていましたが、「開発独裁とデザインの政治学」を報告したパクは、韓国の４大河川の開発に反対する市民運動に関わっています。ワークショップ終了後の26日に、ソウル市内の清渓川路の改修工事の問題点を川に沿って歩きながら説明してくれました。「私の生きているうちに、この川を元に戻したい」という彼女の思いに何とかしてあげたいと思っています。

（注）

清渓川復元工事

1958年から川にふたをして道路を作る工事が始められ、1968年にはその上にさらに高速道路がつくられた。しかし年を経て老朽化し、安全性を確保するための補修工事が続けられたが、現大統領李民博がソウル市長選に河川の復元を掲げて当選し、2003年から工事が始められ、わずか２年３ヶ月という短期間で復元工事を完成させた。

しかし短期間での工事であったことで、当初の計画が実現されなかったり、発掘現場から出土した文化財の保全が十分でなかったり、以前の橋の復元もいい加減であったりで、市民からの反発を受けることになった。

散歩してみると、冬のため、立ち木や草は枯れてしまっていて、コンクリートむき出しの寒々とした雰囲気だったが、写真で見るように、緑の季節には多少見栄えがいいかもしれない。水道水を流しているため魚も自生できず、他から補給していると聞いた。ビオトープとはほど遠い復元だった。

スユノモ当日の報告

自己紹介

ただいまご紹介されました境です。いっぱい話したいことあるのですが、あんまり時間もありませんので、２０分ぐらいで収めたいと思います。

一つは年齢ですが、今年の１月で７０になりまして、７０になると日本社会では民生委員が訪ねてくるんです。それで、訪ねてきて、もううちは全然片付いてないんで、よう戸を開けずに押し問答したんです。それってちょっとね、もう老けましたね、一

瞬で。何か知らんけど、歳を取ったという事実に追い打ちをかけるように民生委員が来た。

ここに来れるとは全然考えてなかったんですけれども、「スユ＋ノモ」のことについてはキムウジャ（金友子）さんの本で、『歩きながら問う』ですか、それを以前に読んでましたので一応頭の中にありました。で、行けるっていうことになりましたので、冨山先生の本も全然読んでなかったんですけれども、併せて読んでみたり、それから阪大でイ・ジンギョンさんがなされた報告を読んでみたりしてるうちに、イ・ジンギョンさんが学生時代のことを思い出して述べているのが、もう自分とそっくりだったんで非常に驚きました。

私とイさんの学生運動は楽しい学生運動。そういう学生運動があったのは日本ではこの６０年です、５９年から６０年の安保闘争。７０年も多少ありましたが、それがピークだったと思います。

韓国では６０年に李承晩を倒した学生革命がありました。その時以来、私たちはもう韓国の学生運動には負けたというトラウマを持っています。しかし、それ以降も、いわゆる開発独裁という形の独裁政権が韓国では続いて、多分６０年代に闘った人たちは非常な辛酸をなめてこられたというふうに思います。それに較べて日本の場合、曲がりなりにも民主主義体制ですから、僕らの仲間がのほほんと、それ以降も５０年間過ごしてきてます。６０年から７０年代の学生運動をやった仲間たちです。この人たちはそれぞれ党派を作って、内ゲバやってるところもあるし、非常にお互いにしのぎを削ってる、そういう間柄でした。でも、その人たちの間で突然、研究所を作ろうっていう話が出てきました。それで去年の１２月にルネサンス研究所というものを作る発足集会を成功させました。

ルネサンス研究所

その基本的な内容ですけども、共産主義という言葉を、何かここに同名の雑誌がありますけども、共産主義という言葉をやっぱりしっかり掲げようと。しかし、何て言うのか、従来の政治権力を取ってから社会を革命するというのがほとんどもう無効ではないか、そういう認識の趣意書を神戸大学の市田良彦さんが書いてます。で、市田さんの趣意書が、僕はもう自分は共産主義者に入ってないと皆から見られてると思ってたのですが、それをよく読むと、自分の考えもひょっとして共産主義者として登録できるかなと気が付きました。そういうことならやはり共産主義者宣言（共産党宣言っていうのは実は共産主義者宣言です）、それを自分なりに書かなきゃいけないと思い当たりました。で、用意したのが今日のペーパーです。ですから今日のために書いたものではなくて、私はやっぱり共産主義者だったという、そういうことを確認する文書です。

今年に入って、実は二度「呼び出し」があり「審問」されてます。１回目は２月１９日に行われたルネサンス研究所の研究会で、私が「晒し者」にされました。というのも、いつの間にか私が研究会の責任者にされてまして、しょうがないから研究会を盛り上げるために、まぁ自分が２回ぐらいやって、それがビッグバンになればいいし、ならんかったらならんかったでもう止めたらいい、みたいなことを言いながら引き受けました。で、１９８８年に書いた文書があるのですけれども、それはソ連の崩壊前に、ソ連が何でうまくいかなかったということを原理的に解明した文書ですが、それを今さらですね、当時は誰も何の異論も言わずに、議論も何もなかったのに突然、20

年以上経った今年の２月１９日にそれを議論しようということになったのです。２回目は、実はスユノモでの昨日の晩でした。イさんと同じ楽しい学生運動やったということをその前日の交流会で言ったものですから、それで一体何をしてきたんだといろいろ、若者たちに詰問されまして、全部白状いたしました。

そんな話をしてたら、もう時間が足りませんので、それくらいにしておきます。さて、こんな感じで若い人たちと話できるのはほんとに嬉しいです。４０年ぐらいまで遡った気分です。自分も３０代になったつもりでいるんです。そこで一つ言いたいのは、年寄りって、僕ら３０の頃に年寄りってどんなもんかって分かりませんでしたが経験者として言っときます。人の名前が覚えられない。で、すぐ忘れてしまう、というのはある。それでだいたい世の中では、これは耄碌したというふうにレッテル貼るわけです。でも、そういう目線で年寄りを見ないでください。事柄とか人の名前、自己紹介してくれてもすぐ忘れるのですが、それと思考の衰えとはやっぱり相対的に独自なものです。優しい眼差しで見てやってください。

いま・ここからの社会変革論

前置きが長くなりましたが、今日のペーパーは読み上げずに、ポイントだけ説明します。まず２番目です。社会とは何かっていうことに関して、いわゆる日本の新左翼は何の理解もなかったです。経済が危機になって社会変革が起こるということで、その社会変革は政治権力を取って社会を変えるんだということですから、経済には注目していましたが、そもそも社会とは何かという問題意識すら生まれませんでした。ですから、そういう社会ということが何かっていうことを不問にした社会革命論ではなくて、やっぱり社会とは何かっていうことをはっきり見据えた上での社会変革をやっぱり考えなくちゃいけない。それが私の共産主義者宣言です。そのヒントになるのが、アダム・スミスに発し、それからミードに引き継がれた、人は他人を鏡として自分、人間になれるという、そういうお話です。

そのポイントは３の（１）です。対面関係のところです。結論先書いてありますけれども、人々は既成の社会を対面関係で都度生成している。ですから社会とか、貨幣もそうですけれども、一度生成された時からずっとあって、それにどちらかと言えば拘束されているというふうに考えがちですけども、実は貨幣も社会も皆さん方が日々作っている、作り直している。だから逆に変えられるのです。そういうことの理解のポイントが、その３段落目です。同じ３ページの３段落目に書いてあります。この対面関係で、見る側と見られる側と書いてるし、それから能動と受動ということとも関係するし、それから話す側と聞く側とにも関係するのですけれども、そのどちらかが社会を代表しているのです。

例えば、私が高橋君のポケットから財布を取ろうとしたら、皆さん「えっ」っていう顔をしますよね。ということは、あなた方は当然人間であって肉体的な個人であるという生身の人間でありながら、法律なり道徳なりを表してるわけです。それはマルクスの言葉で言ったら形態規定と言います。だから、人と人の関係にあっては、その形態規定されて、具体的な人間とは別の一般的抽象的なものを代表してしまわざるを得ない。だから、人と人の社会関係の中では、両方とも人間ですよね、突然、神になる訳じゃないので。ところが、その何というか、一般的他者の態度を取得するとミードは言いますけども、その方が分かりやすいですね。一般的他者の態度を、そういうものを自分が、そういう役割を担うということです。それも無意識のうちにそうなるのです。そういう関係を何とかちょっと揺るがせるというか巻き込むという話が先ほどから出ていますが、何となく別の方向に持っていけるようなきっかけが実はそこの中にあるのではないかと思ってます。例えばの話、堀川さんの報告の時にサムソンの社長の話が出ました。で、松下竜一さんとかの優しさっていうのが見られる側なんですよ。ところが、サムソンの社長に抗議するっていうのはやっぱり見る側で、我々が能動の側に立ってるわけです。ですから、社会生成のイニシアティブは見られる側にある、受動の側にあるということだと思います。何て言うんかな、優しさが発揮できる場っていうのはやっぱり見られる側の場合に限られるんじゃないかと。

今日のテーマは「大衆の主体形成」いう話ですが、その主体っていうのは、そういう関係の中で、僕は結局、対面関係の中で新しい社会を作る、そういうことができた時、主体とはその新しい社会だと考えています。ですから、個人が主体であれば言葉にできます。ところが二人の関係の中で新しい社会を作っちゃうと、それは言葉にはならないと思います。そのようなお話を堀川さんはされたのかなとか思いました。それから冨山さんは「正しい説明や連帯はうさん臭い」というお話なさいましたが、これは基本的にマイノリティを見る側です。マイノリティを見ている側です。その場合、一つの見方としては、マイノリティがマイノリティであるのはてめえらに責任があるんだという自己責任論です。マイノリティになっているのは自分らのせいだと。もう一つは、可哀想だから助けたいという発想で、これが「正しい説明」とか「連帯」という言語につながるわけですよね。僕の見るところでは、今日の冨山さんの問題提起は、正しい説明や連帯ではなくて、見られる側の立場を受肉すると言ったらいいのかな、そんな感じに僕は聞こえました。

商品の価値形態論の重要性

最後にマナが論議された時に述べた補助線の話に行きます。マナ的なものは身近にあり、商品や貨幣がそれだという補助線にならなかった補助線。実はこのペーパーの社会生成論のネタですね、ネタは資本論の価値形態論です。今から、その不穏な資本論の読み方を紹介します。まず唯物論の立場では、通常思考と存在の一致が真理であると言います。ところが、マルクスのその価値形態論をちゃんと解釈すれば、存在と思考は絶対的他者であるということがわかります。思考の論理が発揮されているのが商品の二重性の分析です。これは商品を分析して、それで抽象的人間労働が価値の実体だというふうに結論付けます。ところが価値形態論になりますと、資本論研究者はほとんど理解できないのです。簡単な商品の価値形態っていうのは、例えばテレビが２着の上着であるというふうな、そういう形態です。テレビが２枚の上着であるというふうなことを、テレビは相対的価値形態にあり、上着は等価形態にあるというふうに言います。この時、等価形態にある上着は価値の化身になるとマルクスは言うのです。つまり、それはテレビの価値を表現してるのです。そんなことは、思考の論理ではやっぱり分からないのです。なぜならば、具体的なものから抽象的なものに分析によって分解していくというのが思考の論理ですが、価値形態にあっては関係し合うことでお互いに抽象しあってるのです。ですから、テレビは２枚の上着に等しいという、それを商品語と、マルクスは言うのですが、そういうある種の言語なんです。関係の中で抽象しあうというのを名づける事態抽象っていう言葉があります。だから思考による抽象じゃなくて、存在そのものが関係にあってはお互いに抽象しあってる。それはどういうことかと言ったら、テレビも上着も使用価値なんだけども、その使用価値

を関係の中でお互いに価値に抽象しあっているという意味ですね。こんなことは思考の論理には理解不能です。

それで、１時間ぐらいかけないと説明できないことをたった５分で言ってるので申し訳ないですけど。それを踏まえて、後もう一つは、商品からどうやって貨幣が生まれてるかっていうことです。それはもう簡単に言ったら、商品所有者が商品に自分の意志を宿すということです。それも、その行為は意識してやってるのではなくて、無意識のうちでの本能的共同行為というふうに資本論は言ってます。このことを僕は、ソ連が何でうまくいかなかったかということの根本原因だというふうに考えたのです。共産主義の理念は階級の廃止で、それは当然、商品・貨幣の廃止になります。ところが、その商品・貨幣が所有者の無意識のうちでの本能的な共同行為でなされてるとしたら、政治権力を取って法律によって強制しても、無意識を強制によって修正したり、なくしたりするということは不可能です。そういうことならば、その本能的共同行為をしなくてもいいような関係を迂回してつくり出すことが大事になります。

ホロウェイっていう人が『権力を取らずに世界を変える』という本を出しました。彼は主として国家論の見地から、権力を取ることの不毛性を論証しました。でも経済原理を踏まえたその証明ができたのは、私の１９８８年の文書だと自分で勝手に思ってます。そういうことが分かったので、もう伝統的な政治運動ではない社会運動をずっと続けてきました。それで現在やっと、本日のペーパー「いま・ここでの社会変革」という問題、それに対してある程度の提案ができたんではないかと思ってます。

すみません。荒っぽい報告で申し訳ありませんが、一応、私が用意した文章の歴史的経過と骨子みたいなことを説明いたしました。ありがとうございました。

（質疑・応答）

Q　境先生がミードを援用しながらですね、対面、対話関係から社会が生成するということをおっしゃったんですけれども、先ほども高橋さんのお話の中で「２人称」っていう話があったんですけども、１人称・２人称という、見る・見られるという関係、このレベルか、または３人称までも含めた関係、ここまでなら分かると思うんですけども、それが３人称複数の関係だとか、このような集団がある、共同性がある場では果たして有効なのか。それはちょっとどうなのかっていうことと、そういうふうに個から始まるのでなくて、そうならば、集団っていうのは初めから集団性の観点から接近するっていうのはあり得るんじゃないか。

僕がここで書いたのは基本的に、生協運動とも関わってまして、どちらかと言ったら生協運動で使えるようなもの、みたいな要請に結構引っ張られてるところがあります。そういう意味で、生協でみんな一方的にしゃべりまくって失敗するという、そういうのがある.

むしろその組合員が新しい組合員を勧誘する時に聞き手に回ることで、何て言うんかな、向こうにしゃべってもらって、それを通して勧誘のきっかけを掴むっていう、そういうことを念頭に置いてるところがあります。それでこの前、１９日のルネサンス研究所で報告した時に、それでは国家論がないと言われました。例えばプーランザスとかヒルシュとか、そういう人たちが議論していることが欠けているというのです。でも僕からしたら、あの人たちの研究成果はあんまり評価はしないんです。確かに２人、対面で留まってはダメだっていうのははっきりしているのです。資本論のアナロ

ジーで言いますと、簡単な価値形態です。それが展開された価値形態、一般的価値形態、貨幣形態というふうに進みます。でも言語論にしても国家論にしても、多くの理論は最初から３極なんです、２極じゃなくて３極。３極から出発するんです。だから最初から権力が一つの項として入ってるわけです。私の言いたかったのは、２極の対面関係の中に権力発生の原因があるということを言いたかったのです。もちろん、それをちゃんとした国家論にまでまだ全然まとめ上げることはできてません。それはちょっと今後の課題かなとか思ってます。

だから共同性は、そのカギはコミュニケーションじゃないかなとか思ってます。普通、コミュニケーションは情報の伝達という意味で受け取られるのですが、そうではなくて双方向の関係です。ですから見られる側、受け身の人がイニシアティブを発揮できるような、そういう対話関係をどう作るかっていうことが問題だと思います。一般社会では、見られる側というふうに言うと、あるいは受け身と言うとマイノリティで、そこでの問題は、マイノリティの人たちが一番マジョリティの意識を持ってるというとこなんです。ですから、今日の冨山さんの御著作でも、沖縄の人たちのそういう複雑な心理構造を描かれてます。ですから、そういう受け身の立場にある人たちに対して逆に僕らが聞き手に回って、彼らがイニシアティブを発揮できるような、そういう場をどう作れるかということが、この共同の場あるいは共同性ということの要になるのかなとか思ってます。

Q　国家によっては商品性は廃棄されないっていうのはよく分かるんです。それがある種、本能とおっしゃったり、無意識とおっしゃったりしたと思うんですけど。そこまで分かるんです。それに関して二つのあるいは何か重なる問いが、質問と言いますか、それは質問と言うより、せっかくここでお二人がいらっしゃって、ある種語り方が全然違うという話の位置関係って言いますか、あるいは私が考えようとしたところは一体どこに入るのかなということとも関わるんですけれども。本能的なものとするなら多分放っておけば国家的なものに絶対行ってしまうわけです。それはここで書かれてる。おっしゃるように、じゃそれをどう変えるかっていう話が、そこに関わる様々な議論や研究や分析っていうのはやっぱりあると思うんです。私が言いたかったのは割とその辺りだったのです。その辺りと境さん、あるいは高橋さんが具体的に関わりながら考えていらっしゃるのもその辺りでしょうけれども、その辺りと今おっしゃった価値形態論から解き起こすという作業との関係みたいな話が、どっかやっぱり気になるわけです。やっぱりそっちの方が、様々な回路を作るための議論をある種統括するような話にならないようにしていく両者の関係と言いますか、その辺りをどう考えるのかっていうことがやっぱりあって。それは同時に、無意識的なものは放置しておけば国家的なものになる。多分そこにはもっといろんなことがあって、そこから外れようとするものを、これは原理的にはあり得ないけれど、やっぱり外れようとするものを未然に防いでいくようなものがある。つまり場をどう作るかっていう話をした時に、本能的なものが実は何らかのもので維持されている。その時にやっぱり制度やある種、今の国家的なものを議論せざるを得なくなるし、そうじゃない、それを変える際に、その同じものにならないような議論の立て方が必要になってくるように思うんですね。もちろん価値形態論だけからすれば、それは基本的にはあり得ないっていう話でいいんですけれども、そこら辺のこととも関わるようになってて……。

先ほど言おうと思って時間がないので言えませんでした。冨山さんが綱領というわけではないが違いを認めた上で何か共通の土台がいるかなとかいう話をされてました。僕はその８８年の、この「晒しもの」になった議論でいうと、それは無意識のうちでの本能的共同行為です。これで商品世界ができてるんだから、それはやっぱりどうしようもなかったんだという話と、それからそれをなくすには迂回作戦が有効だという、それしかないんじゃないかっていうことで。そのあと何を考えたかと言うと、例えばサムソンが工場の門開けたら誰も働きに来ない、そうなると資本は潰れるわけです。ですから、資本主義倒すのは簡単と言うか、どうやったら倒せるかっていうことを説明するのは簡単で、労働者が誰も働きに行かなきゃ資本は生産されない、そんなものすごく単純なのです。ところが、働かないと生きていけないから工場へ行ってる訳じゃないですか。そうすると、雇われて働かなくとも生活できるような、そういう領域をどれだけ作っていけるかっていうのは、これはやっぱり大きな問題かなというふうに思ったんです。そんなことをいろいろ考えていた時に、日本では１９９７年ぐらいから地域通貨のブームになりました。今はもう下火になって、続いているところはなかなか少ないんですけれども、僕はそれは未来に作られる今の市場の次の存在、市場に替わる次の存在というふうに見てます。市場には支払決済のシステムが必要で、銀行がそれやってるわけです。地域通貨は一言で言えば、それぞれのメンバーが口座を開きます。それがいくらマイナスになっても構わない、そういうシステムです。プラスになっても利子は付きません。ですから、今の銀行が利子を付けるお金を扱ってますが、そのシステムそのまま使って利子の付かない地域通貨のシステムとして再設計することは完全に可能です。そんなことが分かってきましたんで、もう１９９９年の段階では、どうやったら社会革命ができるかっていうのは多分１枚の絵に描けるんじゃないかなと考えるに至りました。で、その絵を酒場なり街頭なりに掛けておくのです。人々はそれを見るけど、こんなの無理だ、できない、とか言いながら見てるわけです。でも何となく、それは記憶に残ってて、本当にどうしようもなくなった時に、「あっ、これで行けるんじゃないかな」とかいう形でひょっとして皆が手をつなぐのではないか。

ですから僕はソ連崩壊のとき、あの過程が階級闘争という常識から言えば、何かどっかの政治党派が指導して、エリートが煽動して革命になるという話でしたが、全然そうじゃなかった。ソ連の民衆の誰も彼もが共産党のやり方と官僚主義のやり方にもう辟易して、でも何となく支配されていたのです。それがもうある日突然「もう嫌だ」と言って、それこそ共同の何か、共同の何とか精神、何かそういう話出ました。共通の観念ですか、それが突然形成されて、それがパワーになったわけです。アラブの運動も何かそういう傾向ありますけれども、でもしんどいところはやっぱり一つの権力を倒してもまた次、作った権力がまた一つの阻害物になるという、そういう現実です。そういう意味では、結構長い道のりになるんじゃないかなとか思います。

Q　先ほどの冨山先生の問いを私なりに補足すると、境さんと高橋さんの間で「党派争い」にならないのかという問いではなかったかと思います。例えば地域通貨についての語り方にしても、二人の口からそれぞれ地域通貨という言葉が出たけれども、その語り方は全く違っていて、これだけ違う二人が一緒にやっていくというのはどういうことなのかということを聞いてみたい。

昔の僕でしたらね、政治的意思統一とかそんなことを最優先しましたから、多分同一性を求めたかもしれません。でも、そういう同一性を追求するっていうこと自体の犯罪性を思想的にはっきりさせてきたし、そういう意味で、それぞれが自立性、唯一性をもちながら人々がどう共同できるのかということが今の最大の関心事になってます。唯一性を残した諸個人が共同できるという関係っていうのは、一つは協同組合の事業です。それは、そういうことができる形式なんです。ですから、対話的関係を通して事業を運営していくというふうな形において、それぞれの個々人が何を考えてるかっていうのは、もう相対化されます。

後もう一つ、僕の立ち位置っていうのは、事業に丸ごと関わってるんじゃなくて、事業やってる共同体があるとしたらその外部にいるという、そういう立ち位置です。ある意味ではコミューン的な、そういう共同体を考える場合に、そういうものにも外部との結び付き、外部のちょっと変わった人たちとどういう関係を作れるかっていう、そういうことが非常に大切じゃないかなとか勝手に思ってます。

（最後に）

あの一言。すみません。ほんとにありがとうございました。僕はもう１ヶ月間ぐらいスユノモで缶詰で研修してるような気分になっております。

後記

20年以上前の文書を検討していただくというチャンスをいただいて、自分自身も勉強しようと考えて、ルネサンス研究所の研究会に関わってきていますが、震災と原発事故というとんでもない事態が起きたことで、理論的興味よりも、せっかく作り上げた研究所のネットワークで実践的に何が出来るかという問題に直面することになりました。

私自身政策提言に取り組んでみて、この間の日本の社会システムの政治的根幹に官僚支配があるという認識が強まり、それへの対抗をどのようになしとげていくかということでいろいろ考えてきたのですが、その官僚支配体制そのものが、恐ろしいスピードで劣化してきていて、政治の機能麻痺もその現れのように感じています。

資本による支配は市民社会で餓えの規律として貫徹し、商品・貨幣・資本による物象化と物神性により、それが人々にとっては自然的な規律として迎えられているなかで、政治的な様々な施策は官僚によって企画実施されてきていました。議会を巡る抗争、選挙戦は、この日本の政治の基幹構造に手を触れることなく、それの腐食をなすすべもなく見送っていたことの帰結として、原発立国の破綻が事故という形で表面化し、劣化についてのダメ押しをしたのです。

おそらく、原発事故は、日本の官僚制の中枢を直撃し、日本の官僚支配をゆるがせたに違いありません。しかし政府や政党やマスコミは、日本の伝統的政治（官僚独裁政治）を擁護する側に回り、事実上の大連立で腐食した官僚制を補強しようとしています。この現実に対してどのように対抗していけるか、脱原発の運動の発展過程の中で、この問題を考え、実践していきたい。これまで関わってきた社会的企業の法制化運動の新たな進展も、そこから見えてくるような気がしています。